広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	新訳『大方廣佛華厳経』音読史における喜海撰『新訳華厳経音義』の音注
Author(s)	佐々木，勇
Citation	訓点語と訓点資料 ， 136 ： 11 - 22
Issue Date	2016-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039734
Right	Copyright (c) 2016 Author
Relation	

新訳『大方廣佛華厳経』音読史における喜海撰『新訳華厳経音義』の音注

佐々木　勇

『華厳経』の場合、「加点（記述）伝承時代」の音義は、高山寺蔵『新訳華厳経音義』『貞元華厳経音義』安貞二年（一二二八）写本が現存最古のものである。このうち、喜海撰『新訳華厳経音義』は、嘉禄三年（一二二七）に宋版の反切・同音字注を引用して成ったことが判明している。[5] そして、これらの反切・同音字注を「伝承呉音で読んで該字の音と声調を導き出した。」ことが説かれている。[6]

しかし、宋版の反切を伝承呉音で読んでも、帰字の音が日本漢音形となる「僮渠鐘反」「覲渠恪反」のような場合が有る。沼本克明（一九八〇）は、この「僮（キン）」「覲（キン）」などを、「反切音の結果が漢音形となって現れたものではないか」とした。[7]

ここに、『華厳経』は、『法華経』『大般若経』とは異なり、伝承読誦音よりも中国の反切音を優先する場合が有ったのか、という疑問が生じる。

そこで、次の二点を調査・考察することを、本稿の目的とする。

A．新訳『華厳経』読誦音に、宋版の反切によって漢音に変更されたものが存したのか。

B．新訳『華厳経』音読史において、喜海撰『新訳華厳経音義』の音注はどのように位置づくのか。

○、問題の所在と本稿の目的

日本において、呉音中心に読み継がれて来た代表的な経典として、『妙法蓮華経』『大般若波羅蜜多経』および『大方広仏華厳経』が挙げられる。それぞれの読誦音を加点した古訓点資料が残存しており、日本漢字音史の研究に活用されている。その結果、それらの古訓点は、古来の読誦音を残す一方、日本漢字音史上の変遷をも反映することが知られている。[1]

これらの仏典読誦音は、「口誦伝承時代」から平安後期に「加点（記述）伝承時代」に入ったとされ、[2] 平安後期以降、口誦伝承時代の読誦音を体系的に整理した音義が出現する。

『法華経』の音義は、日本伝承読誦音と中国反切との不一致を解消するため、九条本『法華経音』や保延本『法華経単字』以降、「和風反切」と呼ばれる反切を生み出した。[3]

『大般若経』の音義も、眞興『大般若経音訓』（逸書）や公任『大般若経字抄』のように、同音字注または仮名を用いることによって、中国の反切音と一致しない日本の伝承読誦音を注した。[4]

『法華経』『大般若経』それぞれの方策によって、いずれも伝承読誦音が保持・継承された。

右の問題ＡＢを解明するため、左の方法を採る。

Ａ．喜海撰『新訳華厳経音義』成立以前の新訳『華厳経』読誦音における漢音加点例を調査する。

Ｂ．

① 喜海撰『新訳華厳経音義』が引用した宋版反切・同音字注が反映する中国音を推定する。

② 喜海撰『新訳華厳経音義』における反切・同音字注と仮名音注との異同を見る。

③ 喜海撰『新訳華厳経音義』の宋版反切・同音字注および仮名音注を新訳『華厳経』読誦音史上に位置づける。

一、新訳『華厳経』読誦音における漢音形

—Ａ．喜海音義成立以前の新訳『華厳経』読誦音における漢音形—

0．喜海撰『新訳華厳経音義』の漢音形

沼本（一九八〇［一九九七再録］）で漢音形として掲げられた『新訳華厳経音義』の四十三例のうち、反切・同音字注と仮名音注とが一致する漢音加点例を、本稿の用例の掲げ方に変更して、すべて掲げる（以下、漢音読には、左傍線を引く）。

僮(平)〈渠鎮反〉其(上濁)　覲(平)〈渠恪反〉謁(入)〈於歇反〉　覲(平)〈渠恪反〉仰(平濁)　巨(上)麗(去)〈郎計反〉　崇(上)〈士弓反〉　麗(平)〈郎計反〉　精(去)麗(去)〈郎計反〉　鈴(上)〈音靈〉　鐸(入)〈徒各反〉　映(去)〈於敬反〉蔽(平)〈必祭反〉　映(去)〈於敬反〉　奪(入濁)〈徒活反〉　桀(平)映(去)〈於營反〉　庇(平)〈卑至反〉　暎(去)〈於敬反〉　交(去)映(平)〈於敬反〉　誘(上)〈與久反〉　誨(平)〈荒内反〉　化(平)誘(上)〈與久反〉　誘(上)〈音酉〉　誨(平)　寛(平)〈苦官反〉宥(去)〈音右〉　巾(平)馭(平濁)〈魚據反〉　關(平)〈古還反〉闡(入)〈下音藥〉　癡(上)闇(平)〈烏紺反〉　環(平)〈音患〉大(平濁)　髻(平)環(平)〈音還〉　陵(平)篋(入濁)〈莫結反〉

右の漢音形が、宋版反切によって生じたものであるならば、引用宋版伝来以前の新訳『華厳経』読誦音にこれらの漢音は存在しないはずである。

以下、鎌倉初期以前の『華厳経』訓点資料を調査する。

1．新訳『華厳経』平安初期点

石山寺蔵新訳『華厳経』平安初期点（一切経第二十函・二十一函）の字音語中、「税（西反）」（巻第二八）・「翊（由ク反）」（巻第七五）・「袤（ホウ反）」（巻第三三）は、漢音形を注している。[8]

右の漢音形三例のうち「税」「翊」は、高山寺蔵『新訳華厳経音義』・同新訳『華厳経』寛喜点でも、漢音の加点である。[9]

輸税(平)（尸鋭反）（『音義』52.7）—輸(上)税(上)（寛喜点巻二十八 B47）、翊(入)従（餘力反）（『音義』105.1）—翊(入)従(去濁)（寛喜点巻七十五 212）（『音義』所在 52.7 は、高山寺資料叢書 第十二冊の52頁7行目であることを示す。以下同様。）

一方、「延袤」は、

延袤(平)（莫句反）（『音義』41.5）—延(平)袤(平)（寛喜点巻二十二 80 81 巻七十五 214）・延(薄墨朱平)袤△(薄墨朱平)（巻三十三寛喜点 17）

と、呉音が加点されている（以下、同一字の呉音読例には、左傍に波線〰〰を引く）。この「延袤」は、平安初期の訓読で漢音であったものが、鎌倉時代字音読では呉音になっている。

字音加点例が少ないものの、新訳華厳経の音読語は、平安初期において、漢音をある程度含むものであったことが確認される。

2．新訳『華厳経』平安後期点

○聖語蔵本神護景雲御願経『華厳経』巻第三十五（1078　大方広仏華厳経 巻35b 廿）平安後期頃朱点[10]

湍(平)馳奔激(入濁)（五10）　蚊(去)蚋(去)虻(上)蠅(平)（十一26）　詖(平)心（十三16）

右が本資料加点例の全例である。その中の激(入濁)は、漢音加点例である。

3．新訳『華厳経』院政期点

○東大寺図書館蔵本院政期点（貴重書101部76号）（漢音形を挙例し、同一字に呉音形加点が有る場合のみ呉音形例も【　】内に記し〰〰を引いた。以下、同じ。）

覲(平)仰(平濁)（巻第80）—【瞻(平)覲(平濁)（巻第55）　奉(平濁)覲(平濁)（巻第6180）　往覲(平濁)（巻第70）　礼覲(平濁)（巻第63 75）　當覲(平濁)（巻第77）】

鈴(上)鐸(入)（巻第7679）—【寶鈴(去)（巻第76）　金鈴(去)（巻第64）】

仰(上濁)彼（巻第66）—【瞻(平)仰(平濁)（巻第59）　瞻(平)仰(平濁)（巻第62）　瞻仰(平濁)（巻第62）　渴(入)仰(平濁)（巻第65）　仰(平濁)視(平)（巻第65 66 66）　仰(平濁)観（巻第66）　覲(平)仰(平濁)（巻第80）】　嚴麗(平)（巻第75）　羨(平)慕(上濁)（巻第72）敬慕(上濁)（巻第77）

給(入)孤(上)獨(入濁)園（巻第60）—【盈(去)給(入濁)（巻第59）　潤(平)給(入濁)（巻第59）】

暎(去)蔽(平)（巻第59 59 65 67 76 78 78）隱蔽(平)（巻第63）　蔽(平)（巻第62 62）交(去)暎(平)（巻第60）　暎(去)奪(入濁)（巻第64 64 78）　蔭(平)暎(去)（巻第74 78）　誘(上)誨(平)（巻第62 62 63 64 64 64 65 65 66 66 67 73 76）　寛宥(去)（巻第73）　投(平)彼（巻第51）　投(平)草（巻第51）　投(平)地（巻第63 66 67）　投(平)身（巻第64 64）　関(平)鑰(入)（巻第65）　機(上)関(平)（巻第59 78）　関(平)閉(平)（巻第64）　藪(平)澤(入)（巻第76 76）　潤(平)澤(入)（巻第63 77 78）　悅澤(入)（巻第77）　霊(平)瑞(平濁)（巻第72）　霊(平)藥（巻第67）　危(平)樓(平)（巻第60）　鉤(平)鎖(上)（巻第78 78）　鉤(平)餌(平)（巻第78）　瘡(上)者（巻第78）　業瘡(上)（巻第78）　瘡(上)疱(平)（巻第78）　鬪(平)戦(平)（巻第59）　鬪(平)諍（巻第63）　欽(平)歎（巻第60）　敏(上濁)持佛（巻第76）　頑(去濁)鈍（巻第76）　帝(去)王（巻第78）　擐(平)大悲（巻第78）　計(去)羅（巻第45）　細(去)羅(上)（巻第45）　童(去濁)蒙(平)（巻第62）　祐(上)一切世間（巻第62）　涕(去)泗(平)（巻第63）　地側(入)（巻第63）　禁(平)止（巻第66 67）　顔(去濁)容(上)（巻第66）　美(上)顔(上濁)（巻第70）

○聖語蔵本院政期点

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十五（宮内庁正倉院事務所所蔵聖語蔵経巻カラーCD-R版　通番2160）

僮(平)其（十三16）　暎(去)蔽(平)（一8）　隱(平)蔽(平)（十七27）　鈴(上)鐸(入)（四17）　陂(平)澤(入)（十二10）　澤(入)香（十六13）　悅澤(入)（十六30）　給(入)侍(平濁)（二24）　毀(平)禁(平)（三1）　霊(平)香（七1）　鬪(平)戦(平)（十二29）　鬪(平)時（十四9）　霜(平)雪(入)（十五20）　須(上)臾(上)（十二26）　婦(上)人

（十二21）　【歸仰（平濁）（四10）】

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十七（通番2168）

覲（平）謁（入）（十六19）　狂（平）亂（十五5）　俯（平）仰（上濁）（一12）　仰（上濁）世界（四25）　仰（上濁）住（十三4）　鑽（去）仰（上濁）（十八1）―【瞻仰（平濁）（九21）】

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第五（通番2122）

鈴（上）鐸（入）（八7）―【鈴（去）音鐸（入）響（平）（九8）】　庇（平）暎（去）（九2）　化誘（上）（十13）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第八（通番2132）

鈴（上）鐸（入）（五30）　暎（去）徹（入）（四21六20）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十三（通番2151）

誘（平）進（十五14）

甲種写経『大方広仏華厳経』巻第三十一（通番1971）

入仰（上濁）（五11）　仰（上濁）覆（入）（十四14）　鬪（平）諍（十五26）

甲種写経『大方広仏華厳経』巻第六（通番1966）

階（去）砌（平）（六9）

【覲（平）仰（平濁）（三10）　鈴（上）鐸（入）（六26）　網（去）鐸（入）（七11）　鐸（入）網（五6）】

甲種写経『大方広仏華厳経』巻第二十三（通番1969）

愚蒙（平）（九2）　鬪（平）訟（平濁）（十一21）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第三十九（通番2216）

正后（去）（四29）　計（去）都（上）（十八15）

4．新訳『華厳経』鎌倉初期点

○高山寺蔵本承元三年（一二〇九）霊典加点

『大方広仏華厳経』巻第六十一・巻第六十三・巻第六十七・巻第七十五・巻第七十九（第一四函　24 25 26 27 28）

縈（平）映（去）（巻第79）　映（去）蔽（平）（同上）　顔（去濁）髪（入）（巻第75）　喜顔（去濁）（同上）　洪満（同上）　牽（去）馭（上濁）（同上）　諷（去）詠（平）（同上）　懸（去）布（同上）　厳麗（平）（同上）　開剖（平）（同上）　婦（上）人（同上）　蓊（平）鬱（入）（同上）　洞（平）窟（入）（同上）　投（平）於彼（同上）　【礼覲（平濁）（巻第75）】

○聖語蔵本鎌倉初期点

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第一（貞永二年（一二三三）浄弁校合奥書、通番2112）

祐（上）物（七6）　厳麗（平）（二30）　階（去）砌（平）戸（上）牖（平）（三9）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十三（貞永二年校合奥書、通番2150）

毀（平）禁（平）（十四10）　誘（平）進（十五14）　群蒙（平）（十12）　機（上）関（平）（十一18）　龍（平）奏（平）（十三26）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第十四（貞永二年校合奥書、通番2152）

陂（平）澤（入）（四17）　顔（去濁）容（上）（十六17）　化誘（上）（十23）　蔭（平）映（去）（四13）　琴（平）瑟（入）（十二27）　雅（上濁）思渕（平）才（平）（十七13）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第二十七（通番2190）

映（去）蔽（平）（七25）　貢（平）高（十一18）　潤（平）澤（入）（十二13）　投（平）火（十四15）　投（平）地（十五17）　禁（平）断（十六7）

禁（平）絶（入濁）（十七14）　蒙（平）昧（去）（三13）　隆（平）直（入濁）（三21）　隆（平）起（十二24）

乙種写経『大方広仏華厳経』巻第二十八（通番2192）

覲（平）仰（平濁）（五4）　勧誘（去）（一15）　教誘（上）（五23）　若仰（上濁）（十四24）　顔（去濁）貌（上）（八15）　寛（平）宥（去）（三25）　才（平）能（平）（三6八15十八1）　厳麗（平）（七22）　臨（去）馭（上濁）（十八2）

○金剛寺蔵本鎌倉初期点

涕泗咨嗟（三十七）　利犁（七十八）

5．新訳『華厳経』読誦音における漢音形

調査できた訓点資料は、新訳『華厳経』全巻が残存するのではなく、密な加点でもない。それでありながら、『新訳華厳経音義』で指摘された漢音読例のうち闇・環・篋以外は、鎌倉時代初期以前の漢音加点例を見出せた。さらに、右の挙例中には、喜海撰『新訳華厳経音義』には見られない漢音加点例も存する。

よって、喜海撰『新訳華厳経音義』成立以前の新訳『華厳経』読誦音に、比較的多くの漢音形がすでに存在していた、と言える。(1)

二、喜海撰『新訳華厳経音義』反切・同音字注の整理・分析

―B① 喜海音義の反切・同音字注が反映する中国語音―

喜海撰『新訳華厳経音義』の宋版反切・同音字注を、華厳経読誦音史に位置づけるためには、喜海撰『新訳華厳経音義』が引用した宋版反切・同音字注を整理・分析し、反映する中国音を推定する必要があろう。

しかし、宋版華厳経(小双紙本)および宋版一切経福州版が公開されていないため、その音釈に関する先行研究は限られている。

高田時雄は、「福州東禅寺版以降の江南諸蔵には函末あるいは巻末に音釋を附す。(略)これら各蔵経の音釋は、時に若干の異同が見られるものの、基本的には一致する。この音釋が一体いかなる由来を有するものであるかについては当面全く手がかりがない。恐らくは唐末五代頃の江南に行われた蔵経に附けられていたものが祖本で、『隨函録』の引く「某某経音」の類であろうと思われる。」と推測した。(12)

また、山本秀人は、東禅寺版の音釈反切に「音義云」として『玄応一切経音義』が引用されていることを指摘した。ただし、それは部分的であり、『大広益会玉篇』・『廣韻』反切とも「用字の大半が合わなかった」と報告している。(13)

そこで、喜海撰『新訳華厳経音義』引用宋版反切を、中国中古音の体系と対照してみた。その結果、以下の異同が見られた。その主なものを示す。(14) ただし、梵語音訳字は除き、対応する上・去・入声韻を平声韻で代表する。問題とする字に訓点が加点されている場合は、その訓点も記す。

【声類】

1．重唇音・軽唇音の分離

喜海撰『新訳華厳経音義』が引用する反切は、掲出字と反切上字の唇音軽重が基本的に一致している。

左が重唇音・軽唇音の不一致例のすべてである。

○重唇音を軽唇音で注した例

明母字―微母字‥（「明母字を微母の反切上字で注した例」の意。以下、同様。）

貿(平)〈亡侯反〉（113.4）　杪(平)〈亡沼反〉（14.6）　靡(上)〈亡彼反〉（11.4）

幇母字―非母字‥奔(去)〈甫悶反〉（109.6）　鄙(平)〈封美反〉（10.5）

○輕唇音を重唇音で注した例

微母字―明母字‥輞(去)〈莫朗反〉（81.5）

重唇音と輕唇音とが音韻として区別されるのは、八世紀後半以降と推定されている。[1-5]

なお、本資料で重唇音と輕唇音とを区別しない例には、重唇音を輕唇音で注する例に比してその逆は少ないこと、明母を微母で注する例が比較的多いことも、唐代諸音義の実態と一致する。[1-6]

2．全濁声母の無声化

掲出字と反切上字との対応が全濁声母の無声化を反映する、と解釈される例を左に掲げる。

○並母（全濁）―滂母（次清）‥埤(平)〈普米反〉（20.7）‥埤(平)〈疋詣反〉（92.3）

○並母（全濁）―幇母（全清）‥疲(平)〈彼爲反〉（75.7）

○奉母（全濁）―敷母（次清）‥氛(平)〈芳文反〉（88.1）

○群母（全濁）―見母（全清）‥基(上)〈居之反〉（15.6）　岐(上)〈敧羈反〉（16.5）　揭(入)〈居謁反〉（26.4）

○群母（全濁）―曉母（全清）‥吸(入)〈虛立反〉（114.4）

○澄母（全濁）―端母（全清）‥堆(平)〈都回反〉（103.6）　堆(平)〈都雷反〉（101.4）

○幇母（全清）―並母（全濁）‥編(去)〈蒲典反〉（88.6）

○非母（全清）―並母（全濁）‥粉(平)〈蒲悶反〉（28.6・103.1）

○見母（全清）―匣母（全濁）‥袨(平)〈胡練反〉（48.5）

○端母（全清）―澄母（全濁）‥堆(平)〈直追反〉（99.2）

○精母（全清）―從母（全濁）‥沮(上)〈才与反〉（19.1）・沮(上)〈才呂反〉（35.7・41.1・57.1）・沮(上)〈慈呂反〉（59.5・68.1）・纔(平)〈昨來反〉（35.7）

○清母（次清）―牀母（全濁）‥妾(入)〈士接反〉（57.5）

○曉母（全清）―匣母（全濁）‥醯(上)〈乎兮反〉（71.5）

【韻類】

3．一等重韻の合流

○冬韻字―東韻一等字‥統(去)〈他孔反〉理（28.2）

○咍韻字―泰韻開字‥逮(平)〈唐蓋反〉十（68.1）

○談韻字―覃韻字‥伽藍(上)〈郎含反〉（28.1）

4．二等重韻の合流

○銜韻字―咸韻字‥鶱巖(平濁)〈五緘反〉（7.5）　巖(平濁)〈五緘反〉谷（92.3）　巖(平濁)〈五咸反〉巘（93.3）　籠檻(上濁)〈胡減反〉（43.5・58.7）　軒檻(上濁)〈胡減反〉（55.4・92.4）　軒檻(上)〈胡減反〉（83.2）

○佳韻字―皆韻字‥懈(平)〈古拜反〉惰（52.4）　迫隘(平)〈烏介反〉（34.4・61.6）　迫隘(平)〈於戒反〉（21.2）　非隘(平)〈於戒反〉（9.2）

○耕韻字―庚韻字‥隱莖(去)〈戶庚反〉（81.3）　堅硬(平)〈顏孟反〉（21.2）

○山韻字―刪韻字‥忍轄(入)〈翌八反〉（85.6）

5．三等專屬韻と同攝内の三等乙類韻との合流

○塩韻三等字―嚴韻三等字‥諂(平)〈丑儼反〉（74.6）　毘笈(入濁)〈其劫反〉（112.6）

○元韻三等字―仙韻三等字‥諠(平)〈呼員反〉（54.4）

○嚴韻三等字―塩韻三等字‥怯(入)〈去涉反〉怖（34.2）

6．四等韻と三等甲類韻との合流

○齊韻四等字―祭韻甲類字‥階砌(上)〈七藝反〉（11.2・17.4）

○添韻四等韻字―塩韻甲類字‥恬(平)〈田鹽反〉然（45.4）

○先韻四等合字―仙韻甲類合字‥縺(平)〈古尭反〉桊（113.3）

○青韻四等字―清韻甲類字‥戇感(入)〈倉亦反〉（27.3）

7．臻韻・真韻・欣韻の合流

○臻韻字―真韻字‥時蓁(平)〈側巾反〉（8.3）　已蓁(平)〈側巾反〉（25.6）　不蓁(平)〈側巾反〉（103.3）

○真韻字―欣韻字‥罪釐(平)〈許近反〉（79.3）

8．支攝諸韻の合流

○支韻三等合字―脂韻三等合字‥不萎(平)〈於追反〉（72.3）　爲(上)師〈所類反〉（57.6）　飢羸(平)〈力追反〉（49.5）　羸(平)〈力追反〉杇（64.5）　衰羸(平)〈力追反〉（99.4）　臺蘂(平濁)〈汝水反〉（64.2）　華蘂(平濁)〈而水反〉（73.7）

○支韻三等開字―之韻三等開字‥騎(上)從〈其記反〉（96.6）　塵累(平)〈力喜反〉（25.5）　金翅(上濁)〈詩志反〉（73.4）

○支韻四等開字―脂韻四等開字‥欲剌(上)〈七四反〉（54.1）　定剌(上)〈七四反〉（78.3）

○支韻三等合字―微韻三等合字‥危(平)脆〈語韋反〉（40.5）

○支韻四等開字―之韻四等開字‥俱枳(上)〈經以反〉（88.2）

○支韻四等字―脂韻三等字‥迴避(平)〈婢致反〉（93.6）

○脂韻三等開字―支韻三等開字‥雉(上)〈直爾反〉堞（91.2）

○脂韻三等開字―之韻三等開字‥弧矢(上)〈式耳反〉（80.4）

○脂韻三等開字―微韻三等開字‥暨(上濁)〈其既反〉于（34.41）

○脂韻四等開字―支韻四等開字‥咨(上)〈子柢反〉嗟（87.5）

○之韻四等開字―微韻三等開字‥熙怡(平)〈以依反〉（80.3）

○微韻三等開字―支韻三等開字‥機(上)〈又（入）宜反〉關（59.6）

9．青韻・庚韻・清韻と蒸韻との合流（宋代音の反映）

○青韻字―蒸韻字‥飄擊(入)〈古力反〉（12.2）　扣擊(入)〈古力反〉（55.7）　雨滴(入)〈都力反〉（26.3）　櫪溺(入)〈奴力反〉（27.1）　躅滌(入)〈徒力反〉（25.6）

○庚韻字―蒸韻字‥劇(入)〈渠力反〉苦（34.2）

○蒸韻字―清韻字‥翼(入)〈羊益反〉從（48.1）

10．支韻・脂韻・微韻（止攝）と廢韻（止攝）・齊韻・祭韻（蟹攝）との合流（宋代音の反映）

○支韻字―齊韻字‥埤(平)〈普米反〉堄（20.7）　埤(平)〈疋詣反〉堄（92.3）

右に掲げた菩海音義の反切は、すべて宋版の音釈・音義からの引用であると考えられる。[1-7] そして、右1～10の事項は、慧琳『一切經音義』（七八八―八一〇年撰）にまとまって現われている唐代音、

あるいは宋代音に特徴的な事象である。[18]

喜海音義が引用した宋版の反切は、唐代音および宋代音を部分的に反映している。[19]

三、喜海撰『新訳華厳経音義』反切・同音字注と仮名音注との比較 —B② 喜海音義の反切・同音字注と仮名音注との異同—

1．反切・同音字注と加点音注との不一致例

喜海音義が引用した宋版反切・同音字注は、唐代音および宋代音を反映するものであった。そのため、反切・同音字注と呉音読を中心とする伝承読誦音加点注との不一致例が、前節の挙例中にも見られた。左に、反切・同音字注と加点音注との不一致例を追加する（日本漢字音の清濁不一致例も含む）。

○禮(平)觀(平濁)〈渠恪反〉（87.1）　瞻(平)觀(平濁)〈渠鎮反〉（70.4）

「渠恪反」「渠鎮反」の反切を引用しながらも、呉音ゴンを加点する右の語例が存する。

○垣(平)〈于元反〉（19.3・83.4）　垣(平)(クワンに撥音)〈羽元反〉（55.7）

仮名音注「クワン」は、反切に一致しない。[20]

○媒(平)〈莫來反〉定（58.2）　○軒(去)〈虚言反〉檻（83.2）　軒(去)〈許言反〉檻（44.4・55.4・92.4）　○酸(去)〈蘇官反〉楚（21.5）　酸(去)〈蘇官反〉酸（46.7）　酸(去)〈蘇官反〉劇（49.6）　○完(去濁)粒〈戸官反〉（51.3）　○問訊(平濁)〈下音信〉（35.4・68.6・77.3）　○信軸(入濁)〈下音逐〉（85.5）　○奮迅(平濁)〈私閏反〉（17.2・64.7・85.1）　○劇(入)〈渠力反〉苦（34.2）　○鐸(入)〈徒各反〉（16.3）　○樹岐(上)〈敕(左)(朱)勅字也羈反〉（16.5）　○危(平)〈語韋反〉脆（40.5）　○誨(平)〈荒内反〉（47.3）

以下、多数の類例を挙げることは省略する。大部分は、反切・同音字と一致しない伝統的な華厳経読誦音を加点したために生じた不一致例である。

2．反切・同音字注と加点音注との一致例

一方、すでに記したとおり、引用反切・同音字注と加点音注とが一致する例も存する。

しかし、本音義の仮名音注全体の中に、反切・同音注に依ったとしか解し得ない「不〈方久反〉」「寶(ハウ)〈博抱反〉」の類は無い。

四、喜海撰『新訳華厳経音義』音注の新訳『華厳経』読誦音史上への位置づけ —B③—

1．ここまでの検討結果

以上の検討結果をまとめると、次の通りである。

一、新訳『華厳経』読誦音は、喜海撰『新訳華厳経音義』成立以前から比較的多くの漢音形を交えるものであった。宋版の反切・同音字注によって変更されたものではない。

二、喜海撰『新訳華厳経音義』が引用する宋版の反切・同音字注は、中国唐代音および宋代音と一致する部分を含む。

三、喜海撰『新訳華厳経音義』の仮名音注には、宋版の反切・同音字注に一致しない呉音読加点例が多い。一方、反切・同音字注に依らねば生じない仮名音注は無い。

2．考察

右の通りであれば、喜海はなぜ、宋版の音注から成る『新訳華厳経音義』を作成したのであろうか。

新訳『華厳経』読誦音に喜海音義成立以前から存した日本漢音は、唐代の諸音義から知られる音体系に近い。[21] 宋代音として本稿で指摘した反切も、仮名音注では唐代音と差が無い。そのため、新訳『華厳経』読誦音に宋版伝来以前から存した漢音読は、宋版反切が反映する唐宋音と一致する。

当時の高山寺では、宋版一切経を初めとする宋版諸本や宋の文物を積極的に蒐集していた。[22] 宋版一切経福州版および多くの南宋版章疏の高山寺請来は、建保三年（一二一五）頃とされる。[23] それらの宋版を参照・学修した喜海は、新訳『華厳経』読誦音に存する漢音と一致する反切が有ることに気づいたであろう。喜海は、このような背景のもと、新来の宋版音注に全面的に依拠した新たな『新訳華厳経音義』を作成したのではなかろうか。

しかし、先に示した通り、『新訳華厳経音義』の反切・同音字注と加点された仮名音注・声点とは、完全には一致しない。唐宋音を反映する宋版反切を引用しながら、呉音読中心の伝承読誦音を加点したためである。

中国出自の反切を記しつつ伝承読誦音を加点した例は、他にも存する。

○醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』平安後期点—寶(ハウ)〈博抱反〉・報(ホウ)〈博耗(カウ)反〉・不(フ)〈方久反〉・風(ルウ)〈方隆反〉など。[24]

○唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政期点—貪(ヲウ)〈烏江反〉・顔(カン)〈牛年反〉・征(セイ)〈尚楊反〉・擊(ケキ)〈渠悪反〉など。[25]

○『蒙求』一三二〇年頃点—遺(ヰ)〈以醉反〉・冠(クワン)〈古段反〉・墮(タ)〈徒果反〉・曠(クワウ)〈苦謗反〉など。[26]

したがって、喜海撰『新訳華厳経音義』が採った伝承読誦音優先の方針は、特異なものではない。[27]

喜海撰『新訳華厳経音義』においても、『法華経』『大般若経』同様、中国出自の反切と伝承読誦音とが異なる場合は、伝承読誦音が採用された。その喜海音義の加点を基に、高山寺蔵寛喜元年（一二二九）識語本が加点されたことが指摘されている。[28] こうして、新訳『華厳経』読誦においても、伝承音の読誦・加点が行なわれていった。

喜海撰『新訳華厳経音義』の音注は、漢音読を交えて伝承されてきた読誦音に新来の宋版音注による根拠を与え、嘉禄三年（一二二七）の時点において伝承読誦音を整理したものである、と『華厳経』読誦音史上に位置づけられよう。

五、結論

本稿における検討の結果、はじめに設定した問題二点について、次の結論を得た。

A．新訳『華厳経』読誦音に、宋版反切の引用によって漢音に変更されたものが存するのか。

新訳『華厳経』読誦音は、宋版反切の影響によって変更されることは無かった。

B．新訳『華厳経』音読史において、喜海撰『新訳華厳経音義』の音注はどのように位置づくのか。

引用の宋版音注は、漢音読を交えて伝承されてきた新訳『華厳経』読誦音に中国正式音注の根拠を与えるためのものであった。喜海音義以前も以後も、新訳『華厳経』は、呉音読中心の伝承音で読誦され続けた。

喜海が『新訳華厳経音義』を撰した鎌倉時代には、泉涌寺俊芿や禅僧による唐音受容・中国語学習が進められ、宋・元の禅僧が次々と来日した。[29] その時代に、複数の入宋僧を含む高山寺明恵集団[30]は、宋の文物を積極的に取り入れながらも、『華厳経』の伝承読誦音を変更することなく後世に伝えた。

本稿によって知られた事柄は、日本における当該仏典読誦の意義を考える際に、考慮されるべきものであろう。

注

(1) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)等、参照。

(2) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院)八六頁。

(3) 小西甚一『文鏡秘府論考　研究篇上』(一九四八年、大八洲出版)、吉田金彦「中古日本呉音の表記史的考察　—法華経単字の反切と字音をめぐって—」(「静岡女子短期大学紀要」4、一九五七年十月)、注(2)沼本著書第一部第三章、参照。

(4) 築島裕「大般若経音義諸本小考」(「東京大学教養部人文科学科紀要21(国文学・漢文学)」、一九六〇年三月)、注(2)沼本著書第一部第一章・第二章、参照。

(5) 池田証寿「宮内庁書陵部蔵高山寺旧蔵本宋版華厳経調査報告(一)」(『平成十六年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団、二〇〇五年三月、pp.81-95)、同「高山寺蔵新訳華厳経音義と宮内庁書陵部蔵宋版華厳経」(石塚晴通教授退職記念会編『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院、二〇〇五年五月、pp.143-159)、同「高山寺蔵新譯華嚴經音義について」(『漢文読法と東アジアの文字』ソウル　太学社、二〇〇五年十二月)、同「高山寺蔵新譯華嚴經音義和宮内聽書陵部蔵宋版華厳經」(『日本學・敦煌學—石塚晴通教授退職紀念論文集』上海辞書出版社、二〇〇五年十二月、pp.268-281)、同「宮内庁書陵部蔵高山寺旧蔵本宋版華厳経調査報告(二)」(『平成十七年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団、二〇〇六年三月、pp.241-250)、同「高山寺新訳華厳経音義と宋版大蔵経」(『平成二十五年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団、一〇一四年三月)、佐々木勇「宋版の注文から作成された日本文献　—高山寺蔵喜海撰『新譯華嚴經音義』—」(「国語と国文学」二〇一六年五月刊行予定)、参照。

(6) 注(2)沼本著書、一一三頁。

(7) 沼本克明「高山寺蔵字音資料について」(『高山寺典籍文書の研究』(一九八〇年、東京大学出版会)所収。後、注(2)沼本著書に収載(その一一五頁))。

(8) 大坪併治『石山寺本大方広仏華厳経古点の国語学的研究』(一九九二年、風間書房)二二頁およびの原本調査に依る。大坪著書記載の二十四例に、原本調査で若干例を加えることができた。

(9) 榎木久薫「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経　加点字翻刻並びに分韻表」(「鎌倉時代語研究」第二一輯、一九九八年五月)および原本調査による。

(10) 築島裕「正倉院聖語蔵経巻調査報告(一)　—奈良時代書写の華厳経について—　Ⅲ付論ⅰ」(「南都佛教」第八十六号、二〇〇五年十二月、『築島裕著作集　第二巻』(二〇一五年、汲古書院)所収)にも、仮名音注の指摘が有る。同じく、築島論文で訓点が存することが指摘されている聖語蔵本神護景雲御願経『華厳経』巻第三十九(1085　大方広仏華厳経　巻第三十九)平安後期頃朱点の加点例は、「虔(去)誠(一3)・縝(平)紛(平)(一7)」が全例である。仮名音形はいずれも漢呉同音であるため、漢音形の加点か否かは不明である。なお、飯田剛彦「聖語蔵経巻「神護景雲二年御願経」について」(二〇一二年三月、「正倉院紀要」第34号)における紙背墨書・写経所文書の研究から、「神護景雲二年御願経」の大部分は宝亀年間に書写されたことが判明している。

以下、聖語蔵本の調査は、宮内庁正倉院事務所所蔵聖語蔵経巻カラーCD-R版に依り、その資料連番を記す。

(11) 華厳経読誦における漢音形には、「覲(キン)」が「覲(キン)(平)謁(エツ)(入軽)」「覲(キン)(平)仰(カウ)(平濁)」の語に限って見られるごとく、語によって出現が偏るものが有る。平安時代においてすでに、華厳経読誦の中心である呉音とは異なる漢音を、常用の単語音として取り込んだものと考えられる。この点は、榎木久薫「字音直読資料としての高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経—漢音系字音の混入について—」(「鎌倉時代語研究」第二三輯、二〇〇〇年十月)において、沼本(一九八二)が挙げる法華経・大般若経における漢音読字と一致することを紹介し、指摘されている。ただし、榎木論文では、新訳華厳経の字音直読が寛喜元年(一二二九)の加点本から始まるとして、その時点での問題に特定されている。同じく、呉音読中心資料に見られる漢音形の問題を扱った佐々木勇「親鸞自筆『西方指南抄』における漢音について」(「国文学攷」第219号、二〇一三年九月)も、御参照願いたい。

しかし、「僅(キン)(平)其(コ)(上濁)」は、『華厳経』本文「海水至僅其半」であり、一語とは考えられない。喜海音義の出典である開元寺版宋版一切経音釋も「僅(渠鎮反)」と単字で掲出している。呉音読中心の仏典における漢音混入には、いまだ未解決の問題が残されている。

(12) 高田時雄「可洪隨函録と行滔内典隨函音疏」(『中國語史の資料と方法』(一九九四年、京都大學人文科學研究所)注(45)。

(13) 山本秀人「醍醐寺蔵宋版一切経目録解題(二)(音義)」(『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第一冊、二〇一五年三月)。

(14) 声類では匣母・于母、從母・邪母、船母・常母の合流、韻母では厳韻三等乙類字・塩韻三等乙類字と添韻四等字との合流かと解される例などが存する。少数例であるため、挙例を止めた。

(15) 平山久雄「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」(「北海道大学文学部紀要」15(2)、一九六七年三月)、参照。

(16) 大島正二『唐代字音の研究』(一九八一年、汲古書院)、参照。

(17) 注(5)諸論文、参照。

(18) 黄淬伯『慧琳一切経音義反切攷』(一九三六年、中央研究院歴史語言研究所專刊　六)、河野六郎「慧琳衆経音義の反切の特色」外『河野六郎著作集2』(一九七九年、平凡社)所収論文、注(15)平山論文、三根谷徹『中古漢語と越南漢字音』(一九九三年、汲古書院)等。

(19) 宋版引用反切が中古音反切と大部分一致しないのは、その反切が唐代音および宋代音を反映するものであったためであろう。このたびの検討が誤りでなければ、未活用の唐代音・宋代音資料が大量に出現したことになる。東禅寺版以降の宋版音釈の全体的な研究が必要である。それらには、江南方言が含まれている可能性も有る。

(20) また、垣(クワン)(平)(エンに朱訂)墻(上音丸[「縁」に朱訂])(87.7)では、相当する音注は小双紙本に存せず、開元寺版「上音園一音丸」から「一音丸」の方のみを喜海は引用している。高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経字音点でも、垣(クワン)(平)牆(シャウ)(上)(巻第六四8)・垣(クワン)(墨平)(巻第六六234 319)と、「クワン」の加点例しか見られない。すなわち、『新訳華厳経音義』・『貞元華厳経音義』では、伝承字音読に合う音注を選択している。ただし、大部分は、反切に合わせて後に「エン」に朱訂され、「音丸」も「縁」に朱訂されている。

(21) 有坂秀世『上代音韻攷』（一九五五年、三省堂）、藤堂明保「漢音と呉音」（「日本中国学会報」十一、一九五九年）、満田新造『中国音韻史論考』（一九六四年、武蔵野書院）、河野六郎『河野六郎著作集2』、水谷真成『中国語史研究』（一九九四年、三省堂）等。

(22) 常盤大定『支那佛教の研究　第三』（一九四三年、春秋社松柏館）「宋代に於ける華厳教學興隆の縁由」、参照。

(23) 大塚紀弘「高山寺の明恵集団と宋人」（「東京大学史料編纂所研究紀要」第20号、二〇一〇年三月）。

(24) 沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）217頁。

(25) 佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（二〇〇九年、汲古書院）419頁。

(26) 沼本克明「読誦漢音に於ける学習音の介入 ―蒙求字音点の場合―」（「鎌倉時代語研究」第十輯、一九八七年五月）。後、注(2)著書に収載（その一四三頁）。

(27) 現代の漢和辞典において、中国中古音の反切を引用しつつ、漢音・呉音等は伝統的な日本漢字音を記す方針も、この流れを汲むものである。

(28) 注(7)沼本論文、榎木久薫「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経をめぐって」（「鎌倉時代語研究」第十九輯、一九九六年八月）。

(29) 有坂秀世『国語音韻史の研究　増補新版』（一九五七年、三省堂）、湯沢質幸『唐音の研究』（一九八七年、勉誠社）、佐藤武義「中世文化と唐音」（『漢字講座　6』（一九八八年、明治書院）所収）、注(2)沼本著書、榎本渉「中世の日本僧と中国語」（「歴史と地理」第567号、二〇〇三年九月、山川出版社）、参照。

(30) 注(23)大塚論文、参照。

［付記］資料調査のため、高山寺・石山寺・醍醐寺・書陵部・東大寺図書館・国際仏教学大学院大学日本古写経研究所御当局、ならびに高山寺および石山寺聖教調査団の皆様に大変お世話になりました。また、本稿は、平成27年11月8日に東京大学山上会館にて開催された第113回 訓点語学会研究発表会における口頭発表に基づいております。当日は、多くの方々から種種のお教えを頂きました。さらに、投稿後、査読委員の皆様から貴重なご意見を頂戴し、全体的に改稿することができました。記して御礼申しあげます。

［ささき　いさむ、広島大学大学院教授］